

Abstract (Basic): JP 62093210 A

Cationic denatured polyvinyl alcohol is compounded.  
USE/ADVANTAGE - The material forms soft films which closely adheres to the skin, and is easily peeled. It also has skin cleansing effect and antimicrobial activity. Smooth feeling is provided to the skin after peeling without causing irritation.

0/0

⑬ Int. Cl.<sup>4</sup>

A 61 K 7/00

識別記号

庁内整理番号

7306-4C

⑭ 公開 昭和62年(1987)4月28日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全4頁)

⑮ 発明の名称 バック化粧料

⑯ 特 願 昭60-231744

⑰ 出 願 昭60(1985)10月17日

⑱ 発 明 者 清 水 和 彦 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑲ 出 願 人 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

## 明 細 書

## 1. 発明の名称

バック化粧料

## 2. 特許請求の範囲

カチオン変性ポリビニルアルコールを配合することを特徴とするバック化粧料。

## 3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は、カチオン変性ポリビニルアルコール(以下、ポリビニルアルコールをPVAと略記する)を配合することにより、使用感として密着感が強く、柔らかく風合のある剥離し易い皮膚を形成し、剥離した後は肌がつるつるすべすべした状態になり、かつ洗浄効果があり、殺菌力があって、皮膚刺激のないバック化粧料に関する。

(従来の技術)

ビールオフタイプのバック化粧料は、肌の洗浄や脱脂を目的としたフェイシャル化粧料で、皮膚形成剤として、ポリ酢酸ビニルをアルカリでケ

ン化した完全ケン化型PVA、およびこれに加えて要すれば水への溶解を容易にする目的で部分ケン化型PVAを主成分にしている。

(発明が解決しようとする問題点)

しかしながら、従来のPVAを使用したバック化粧料は、硬い皮膚を形成し、剥離した後、肌がつっぱった感じがあり、あまり使用感の満足のいくものではなかった。

(問題点を解決するための手段)

本発明者は、こうした事情に鑑み、前記従来技術の欠点を改良し、従来のPVAの欠点がなく、使用感として密着感が強く、柔らかく風合のある剥離し易い皮膚を形成し、剥離した後は肌がつるつるすべすべした状態になり、かつ洗浄効果があり、しかも皮膚刺激のないバック化粧料を得るべく鋭意研究を重ねた結果、カチオン変性PVAを従来のPVAに代えて配合することにより、目的のバック化粧料が得られることを見出し、本発明を完成するに至った。

すなわち、本発明はカチオン変性PVAを配合

することを特徴とするバック化粧品である。

本発明のバック化粧品は上述の如くカチオン種を含んでいる。一般に、低分子量のカチオン性物質は殺菌力を有し、また風合いのよい独特の使用感触を有するが、多量に配合すると皮膚刺激を生ずるなど安全性面で問題があり、化粧品への配合には難点があった。本発明のバック化粧品はこの欠点をも解決したもので、カチオン性物質の風合いのよい使用感触や殺菌力を十分に生かしながらも安全性は優れている。

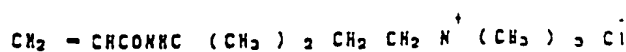
本発明に用いられるカチオン変性PVAはアミノアルキル(メタ)アクリルアミド系単量体、例えばQAPAやQAPMを酢酸ビニルと共重合後、酢酸ビニル単位をケン化したもので、一般に共重合は組織が均一になるようにQAPA(QAPM)を後添加するセミバッチ式あるいは槽型流通反応器により連続方式で合成され、合成品は精製後100℃前後で乾燥される。

重合度は500～2,400で、1分子中でのアンモニウム変性度は1～30mol %である。

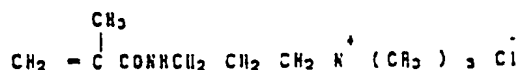
市販品としては、例えばクラレ製のカチオン変性PVA C-318、C-318A、C-118A等がある。C-318は重合度500、けん化度82.6mol % (残りの17.4mol %は未変の酢酸ビニル残基とアミノアルキルアクリルアミド基の合計になる)、C-318Aは、重合度1,500、けん化度89.6mol %、C-118Aは、重合度1,600、けん化度98.7mol %である。

(以下 余白)

QAPA:

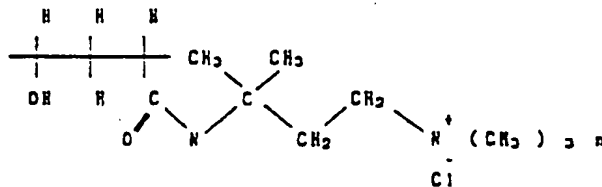


QAPM:

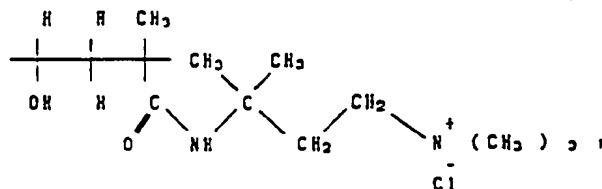


カチオン変性PVAの構造式の例を以下に示す。

QAPA-PVA:



QAPM-PVA:



本発明のバック化粧品には上記した必須成分に加えて、必要により、保湿剤、油分、界面活性剤、低級アルコール、増粘剤、香料、酸化防止剤、キレート剤、色素、防腐防霉剤等、通常化粧品に用いられている成分を本発明の目的を損なわない範囲で配合することができる。

(発明の効果)

本発明のバック化粧品は、使用感として密着感が強く、柔らかく肌にやさしい風合いのある剥離し易い皮膜を形成し、剥離した後は肌がつるつるすべすべした状態になり、かつ洗浄効果がありしかも殺菌力があって、皮膚刺激のないバック化粧品である。

(実施例)

次に実施例及び比較例をあげて本発明を具体的に明らかにする。本発明はこれにより限定されるものではない。配合量は重量%である。

(以下 余白)

## 実施例1、2、3、比較例1(モイスチャーバック)

表-1

	実施例 1	実施例 2	実施例 3	実施例 4	比較例 1
①精製水	63	同左	同左	同左	同左
②エタノール	10	-	-	-	-
③ポリエチレングリコール	3	-	-	-	-
④ダイナマイトグリセリン	10	-	-	-	-
⑤PVA(ケン化度85%、 重合度2,000)	-	-	-	7	14
⑥C-318	28	-	-	7	-
⑦C-318A	-	28	-	-	-
⑧C-118A	-	-	20	-	-
粘度(CPS) 30℃	21,000	20,000	18,000	18,000	20,000
pH	6.2	6.6	7.7	6.0	5.9

(以下余白)

離前のバック膜が肌に良く密着していると  
感じた。

×：比較例1に比べ美容技術者の40%未満がバ  
ック膜が肌に良く密着していると感じた。

## 2. 皮膚の風合いと剥離し易さ。

◎：比較例1に比べ美容技術者の80%以上が皮  
膚が柔らかく風合いがあり剥離し易いと満  
足した。

○：比較例1に比べ美容技術者の60%以上が皮  
膚が柔らかく風合いがあり剥離し易いと満  
足した。

△：比較例1に比べ美容技術者の40%以上が皮  
膚が柔らかく風合いがあり剥離し易いと満  
足した。

×：比較例1に比べ美容技術者の40%未満が皮  
膚が柔らかく風合いがあり剥離し易いと感  
じた。

## 3. 剥離後の肌の状態

◎：比較例1に比べ美容技術者の80%以上が肌  
がつるつるすべすべすると満足した。

## (製法)

①～④を室温にて攪拌溶解し、⑤～⑧を添加し  
て分散膨潤した後、80℃で約2時間加熱攪拌し、  
一昼夜放置してモイスチャーバックを得た。

## (効果)

表-2に実施例1、2、3、4、比較例1を美  
容技術者20名の顔に塗布した時の使用感の試験  
結果を示す。方法は、顔の左半分に実施例品を右  
半分に比較例品を塗布し、約20分を目安に乾燥し  
たバック膜を剥離する。それぞれの自己申告の  
使用性評価の結果をまとめた。

判定の基準は次の通りである。

## 1. 密着感

◎：比較例1に比べ美容技術者の80%以上が剥  
離前のバック膜が肌に良く密着していると  
感じた。

○：比較例1に比べ美容技術者の60%以上が剥  
離前のバック膜が肌に良く密着していると  
感じた。

△：比較例1に比べ美容技術者の40%以上が剥

○：比較例1に比べ美容技術者の60%以上が肌  
がつるつるすべすべすると満足した。

△：比較例1に比べ美容技術者の40%以上が肌  
がつるつるすべすべすると満足した。

×：比較例1に比べ美容技術者の40%未満しか  
肌がつるつるし、すべすべすると満足を感じ  
なかった。

## 4. 洗浄効果

◎：比較例1に比べ美容技術者の80%以上が肌  
がきれいになったと満足した。

○：比較例1に比べ美容技術者の60%以上が肌  
がきれいになったと満足した。

△：比較例1に比べ美容技術者の40%以上が肌  
がきれいになったと満足した。

×：比較例1に比べ美容技術者の40%未満しか  
満足しなかった。

## 5. 皮膚刺激がない

◎：比較例1に比べ美容技術者の80%以上が皮  
膚刺激がないと満足した。

○：比較例1に比べ美容技術者の60%以上が皮

膚刺激がないと満足した。

△：比較例1に比べ美容技術者の40%以上が皮膚刺激がないと満足した。

×：比較例1に比べ美容技術者の40%未満しか満足しなかった。

表-2

使用性項目	実施例			
	1	2	3	4
1. 密着感	◎	◎	○	○
2. 皮膚の風合いと剝離し易さ	◎	◎	◎	○
3. 剝離後の肌の状態	◎	◎	◎	◎
4. 洗浄効果	◎	◎	○	○
5. 皮膚刺激が少ない	◎	◎	◎	◎

(以下余白)

(実施例5) アクネバック

精製水	50.9
エタノール	15
ポリエチレングリコール	2
ジブロピレングリコール	2
クラレ製カオチン変性PVA C-318	30
グルクロン酸クロルヘキシジン	0.1

(製法)

実施例1～4と同様の方法でアクネバックを得た。

(効果)

本発明の殺菌効果を示すため、アクネで悩むバネル10名が1ヵ月本実施例品を使用してところ、10名中8名が肌がきれいになり、にきびもほとんどなくなった。残り2名も若干にきびが残っているが、かなり皮膚が改善されていた。

使用性は、実施例1～4と同様十分満足のいくものであった。

特許出願人 株式会社 資生堂